

腎機能に基づいた投与量設定の実態調査と薬剤師の役割

そうごう薬局開聞店 逸見綾乃

〔目的〕現在、慢性腎臓病（以後 CKD）の患者数は、成人の 8 人に 1 人と推計されている。腎機能低下患者のリスクの 1 つとして、腎排泄薬の血中濃度上昇による、用量依存的な副作用発現が挙げられるため、薬局においても腎排泄薬の服用状況の把握と腎機能を基にした投与量評価は重要である。そこで、腎機能を把握できる血液検査実施患者において、腎機能を考慮した投与量設定がなされているのか、他科受診状況も含めて実態を調査した。

〔方法〕そうごう薬局鹿児島ブロック 5 店舗において、2017 年 1 月から 5 月までに来局し、血液検査の聴取の了承が得られた患者 139 名を対象に、CKD 重症度分類が G3 以下に相当する推定糸球体濾過量（以後 eGFR）が 60ml/分/m²未満の患者数と、その患者の腎排泄薬の使用状況および投与量を評価した。さらに、血液検査を実施した診療科以外での他科処方について、腎機能に基づいた投与設定がなされているか確認した。

〔結果〕139 名の対象患者の年齢内訳は、70 歳以上が占める割合が 54.7%であり、平均 70.4 歳であった。血液検査を実施した診療科の内訳は、内科 132 名、外科 4 名、その他 3 名であった。eGFR60 未満の患者は 51 名であり、その内訳は内科 46 名、外科 4 名、泌尿器科が 1 名だった。そのうち、腎排泄薬使用患者は 23 名であり、過量設定とされる患者は 1 名であった。また、51 名の患者で他科受診が確認されたのは 24 名であり、内訳は外科 9 名、眼科 8 名、耳鼻科 6 名、内科 5 名、泌尿器科 3 名、皮膚科・歯科が各 1 名だった。腎排泄薬服用患者は 4 名おり、抗生剤や整形外科でのデュロキセチン処方であったが、いずれも投与量設定に問題はなかった。しかし重度の腎機能低下患者で服用禁忌となるロキソプロフェン処方が 1 名確認された。

〔考察〕今回、血液検査を実施している診療科の多くは、腎機能に基づいた投与量設定がなされていたが、疑義照会を要する過量設定例もあり、病院と薬局でのダブルチェックの必要性を改めて確認した。他科受診での投与量設定で問題となる患者は認められなかったが、腎排泄薬はあらゆる診療科で処方されるため、定期的な腎機能把握による投与量評価は重要である。また、検査値の把握に至らなかった患者の中にも、潜在的な腎機能低下患者がいる可能性はあるため、かかりつけ薬剤師として、受診医療機関への検査結果の開示の依頼や、血液検査実施の積極的な提案を行っていきたい。

【キーワード】腎機能、腎排泄薬、血液検査、保険薬局

【カテゴリー】15) かかりつけ薬剤師、薬局